

映画と柴又の相互影響力に関する研究

－『男はつらいよ』を対象として－

Keywords

柴又 映画 とらさん
文化的景観 生活 生業



AK16091 福田大祐

1. はじめに

1.1. 研究背景

映画は総合芸術だと言われる。脚本や登場人物はもちろん、演技や音楽、照明、衣装、メイク、映像、建物や大道具・小道具に至るまで全ての芸術要素を掛け合わせて制作されている。そのうちの一つが建物であるが、いつも背景にある建物を気にして観たことはあるだろうか。ただ場所としてそこに存在するだけの建物は誰の目にもとまらないかもしれない。しかし、その背景には、制作者の何らかの意図が組み込まれている。ただ物語を楽しむのではなく、その背景にあるものにまで注意を向けてみると、そこに隠された建築的デザインの意図がみえてくる。

柴又地域は古代から人々が生活し、流通・往来の結節点であった。江戸川によって育まれてきた豊かな自然と、生業を基礎とした下町情緒あふれる空間は、かつての大都市郊外の典型的な例である。そのような景観を現在も維持しながら街として発展しているのは非常に稀であると言える。しかし、近年その独特な景観にそぐわない開発がみられるようになった。これに伴い、柴又では、帝釈天経寺とその門前の景観を中心に、その周囲を囲む農村部空間や都市近郊の低地開発の歴史を伝える空間が重要文化的景観に選定されることで、景観を後世に引き継いでいく取り組みが強化されるようになった。

一方、柴又は映画『男はつらいよ』の舞台となったことでも有名である。映画シリーズの全作で物語の舞台となり、柴又の魅力が伝え続けてきた。これは、観光にも大きく影響している。柴又を訪れる人は、映画に出てきた景色や建物、文化を求め、街を歩く。それに応えるように、駅には寅さんの銅像、参道には昔から変わらない草団子やお店の看板など映画の中の懐かしさを味わえるような街づくりがされている。

1.2. 研究目的

映画内で見られる柴又の変化は、現実から何らかの影響を受けている、もしくは現実に影響を与えていると思われる。それほどまでに「とらさん」は柴又を語る上で重要である。そこで本研究

では、映画『男はつらいよ』を研究対象とし、映画内で起きる時系列的な変化を整理しながら、現実との比較を交えて変化の要因を分析する。

柴又は、重要文化的景観に選定されたことで、その景観を保存し継承することが求められるようになった。しかし、文化的景観とは日々刻々と変わる人々の暮らしの場である。ゆえに、生活に溶け込み、当たり前身近なものとなることで、気づかれることなく失われていってしまうことも多くある。したがって、柴又の普段の生活（現実）だけでは知り得ない変化や魅力を、映画を通して再検討する。そして、映画に表象される柴又と現実の、生活や生業に関する特徴と、映画と柴又の相互影響力を明らかにすることを目的とする。また、映画で街並みや文化、生活などを表象することの意義についても論じることとする。

2. 先行研究

2.1. 帝釈天参道の街並み変遷

映画『男はつらいよ』を建築学的に取り上げた先行研究では、帝釈天参道を調査対象とし、その建物敷地用途とファサードの変化を調査し、その特徴と課題を明らかにしている。分析の結果、多様な用途が混在する街から小売店が中心となる街になったこと、ファサードの装飾が増加したことが明らかになった。これらは映画公開の時期に大きく変化した。また、映画公開以降は、観光地化に向けて格子や灯りの設置が行われている。さらに、40作目（1988年）に電柱・電線が無くなったことが指摘されている。

2.2. 『男はつらいよ』における行為・会話の変化

映画『男はつらいよ』の建築空間とその使われ方に関して取り上げた先行研究では、登場人物の行為や会話がどのように変化しているのかを調査している。その結果、主な変化は、公私の分離や近隣付き合いなどの生活側面にあらわれていることが明らかになった。

3. 研究内容

3.1. 研究対象選定

本研究で対象とする映画は『男はつらいよ』である。本映画はシリーズ化されており、全 50 作品が公開されている。その中で、第 1 作から第 48 作及び第 50 作を研究対象とする。第 49 作目は特別版として公開されており、ストーリーの中心が回想シーンであるため対象からは除外する。

本研究が研究対象地とするのは、柴又のなかで映画に登場する場所のみとする。内部空間は、「とらや」が該当し、外部空間は柴又帝釈天参道である。その他帝釈天経寺及び「さくら」の実家、たこ社長の工場では生活面での変化がみられないため対象外とする。

3.2. 研究方法

主な研究方法は映画分析である。映画分析では、まず映画のシーケンスを内部空間と外部空間に分ける。そして、そこに含まれる要素を「もの」・「観光」・「建物」の 3 つに分類する。3 つに分類した要素を作品ごとに分析・比較し、その変遷をたどることで、映画内における生活や生業の変化を明らかにする。また、映画に登場する場所を「とらや」・「とらや以外の柴又地域」・「その他の地域」の 3 つに分類する。分類した 3 つの場所においてそれぞれ、合計時間とシーン数を作品ごとに記録し、その変化をみる。

4. 研究対象概要

4.1. 映画『男はつらいよ』について

本シリーズは、監督山田洋次による一連の作品である。1969 年から 1995 年まで全 48 作品が公開され、一人の俳優が演じた映画シリーズで最長記録としてギネスブックに認定されている。

柴又では、さくらをはじめとする親戚・近隣住民の生活が描かれ、寅さんは旅に出ている。その旅路で出会ったマドンナに恋をして柴又に連れてくる。久しぶりに故郷に帰ってきた寅さんはマドンナを紹介し、実家を懐かしみながらも、何かと騒動を起こしてしまう。恋に落ちたマドンナとはなかなかうまくいかずに失恋を繰り返す。そしてまた旅に出ていく。この一連の流れが毎作品行われているのが本映画の特徴である。また、2019 年 12 月、22 年ぶりに新作となる 50 作目が公開された。尚、49 作目は特別版として公開されている。

4.2. 葛飾区柴又

葛飾区は東京都の北東、千葉と埼玉両県に接する場所に位置している。その中で柴又は、千葉県との県境である江戸川の西岸に位置し、北部には JR 常磐線、南部には JR 総武線、中央部に京成電鉄本線・押上線、京成高砂駅から北総線や京成金町線などが通っている。また、矢切の渡しなど、古くから水陸交通の結節点・

中継地点として重要な場所であった。帝釈天経寺とその門前の参道を中心として発展し続けながらも、その下町情緒あふれる景観を維持しているとして、2018 年 2 月に重要文化的景観に選定された。

5. 研究結果

5.1. 場所別の放映時間数とシーン数の変化

3 つに分類した場所において、それぞれの時間数とシーン数の変化を表にまとめた。①合計時間②とらやの時間数③とらやのシーン数④とらや以外の柴又地域の時間数⑤とらや以外の柴又地域のシーン数⑥その他の地域の時間数

表 1 場所別の放映時間数とシーン数の変化

	①	②	③	④	⑤	⑥
第1作	1:31:31	0:35:01	15	0:19:31	14	0:29:12
第2作	1:33:09	0:22:32	5	0:13:38	3	0:53:39
第3作	1:29:56	0:25:50	8	0:09:05	5	0:50:59
第4作	1:32:07	0:59:12	15	0:27:52	10	0:07:43
第5作	1:28:33	0:30:50	5	0:07:39	4	0:47:40
第6作	1:29:49	0:45:51	13	0:21:54	11	0:19:37
第7作	1:32:12	0:40:14	13	0:11:49	9	0:37:51
第8作	1:54:13	0:48:29	16	0:25:29	10	0:37:16
第9作	1:47:58	0:40:37	12	0:18:49	7	0:34:21
第10作	1:38:34	0:59:46	14	0:14:13	5	0:20:17
第11作	1:40:04	0:54:32	15	0:05:27	6	0:30:57
第12作	1:47:43	0:55:56	17	0:08:19	6	0:40:11
第13作	1:49:29	0:56:14	12	0:06:12	5	0:38:24
第14作	1:44:08	0:44:57	13	0:02:36	5	0:51:31
第15作	1:31:14	0:46:57	13	0:09:36	6	0:34:00
第16作	1:39:25	1:02:33	15	0:13:14	13	0:21:34
第17作	1:49:19	0:53:08	16	0:04:49	4	0:48:12
第18作	1:43:20	0:34:24	13	0:03:39	5	1:01:55
第19作	1:39:30	1:00:42	11	0:04:44	7	0:30:58
第20作	1:35:06	0:43:16	15	0:09:05	7	0:39:24
第21作	1:47:20	0:45:37	10	0:05:06	6	0:53:23
第22作	1:44:51	0:57:15	13	0:10:42	9	0:29:51
第23作	1:46:42	0:50:19	12	0:05:15	8	0:47:52
第24作	1:44:01	0:59:17	12	0:02:49	5	0:38:43
第25作	1:43:58	0:36:25	11	0:06:20	7	0:58:56
第26作	1:37:10	0:39:40	15	0:08:52	8	0:45:31
第27作	1:44:09	0:47:22	8	0:04:27	4	0:59:51
第28作	1:40:33	0:48:20	11	0:08:09	6	0:30:53
第29作	1:49:50	0:33:37	8	0:02:24	4	1:09:57
第30作	1:46:06	0:57:27	11	0:05:13	5	0:49:24
第31作	1:40:31	0:37:16	8	0:06:42	5	0:53:05
第32作	1:44:27	0:28:05	9	0:10:34	8	1:02:34
第33作	1:41:26	0:22:23	9	0:08:40	9	0:58:00
第34作	1:46:48	0:34:30	11	0:06:19	5	1:02:48
第35作	1:47:52	0:25:49	9	0:10:26	8	1:08:20
第36作	1:45:06	0:31:08	9	0:09:10	7	0:55:29
第37作	1:42:21	0:32:36	9	0:07:52	8	0:58:22
第38作	1:47:13	0:25:52	9	0:04:49	5	1:13:20
第39作	1:41:29	0:28:30	8	0:07:41	7	1:01:59
第40作	1:39:45	0:24:31	9	0:10:15	10	1:01:38
第41作	1:49:42	0:21:19	8	0:07:09	9	1:12:44
第42作	1:48:18	0:19:52	8	0:16:04	10	1:08:52
第43作	1:45:28	0:22:22	7	0:27:50	13	0:50:42
第44作	1:43:46	0:16:53	4	0:19:03	10	1:04:32
第45作	1:41:08	0:18:56	7	0:18:03	11	1:00:39
第46作	1:43:49	0:18:59	6	0:19:11	8	1:01:17
第47作	1:40:34	0:18:53	6	0:12:07	7	1:07:08
第48作	1:47:26	0:26:53	5	0:13:32	8	1:03:42
第50作	1:55:15	0:28:19	12	0:00:55	2	1:19:16

②とらやの時間数の変化をみると、第 30 作 (1982 年) までには時間数に一貫性はないものの平均して 45 分のシーン時間が確認できた。しかし、第 31 作 (1983 年) を過ぎたあたりから、第 48 作 (1995 年) まで平均約 22 分と、とらやのシーン時間がかなり減少していることが分かる。④とらや以外の柴又地域の時間数の変化をみると、第 41 作 (1989 年) までには時間数にばらつきがあり、一貫性は認められなかった。しかし、第 42 作

(1989年)以降時間数の平均値が大きく上がっていることが分かった。⑥その他の地域の時間数の変化をみると、目立った特徴は無いが、ややシリーズ後半にかけて時間数が増加している傾向があることが分かった。シーン数に関しては、時間数と大方比例していた。また、第50作に関しては、とらや以外の柴又地域はほとんどみられなかった。

5.2. とらやの平面

映画に出てくる「とらや」は第1作から第4作までは実際に商店として利用されていたものを撮影場所として使用していた。しかし、建物の老朽化により改修工事を行うことになった為それ以降は撮影には使われなくなった。代わりに第5作以降は、松竹大船撮影所で作られたセットを使用し撮影された。

以上を考慮した上で、映画に登場する「とらや」を映画とセットを元に図面化した。

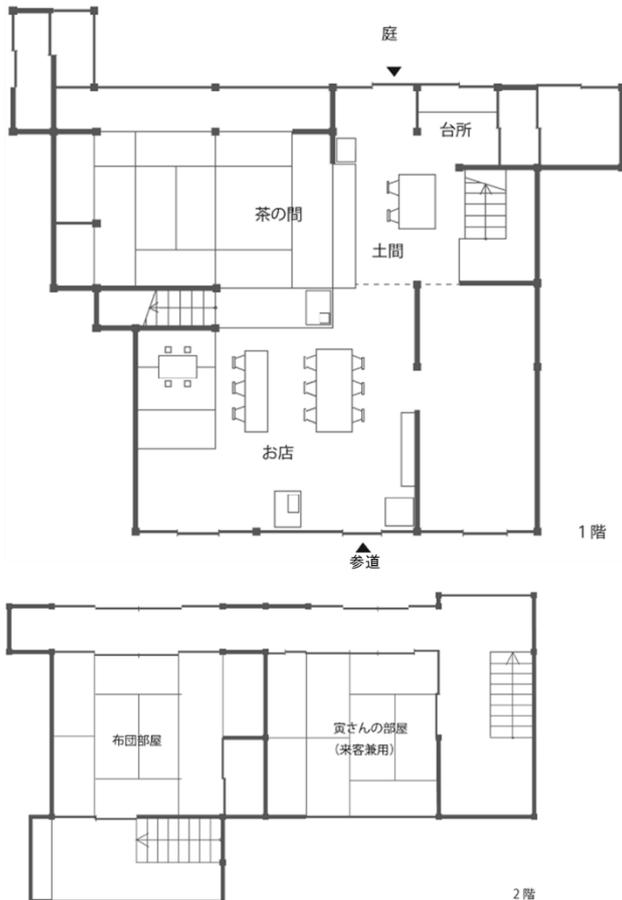


図1 とらや平面

この建物は、店舗併用住宅で、1階の道路側半分が店舗、1階の奥側半分と2階が住居スペースとなっている。この建物の最も特徴的な点が、階段が2カ所あるということ。お店側の階段から上がると布団部屋に直接通じており、土間側の階段を上がると、寅さんの部屋とされている場所に直接通じている。

5.2. 「もの」の分析

5.2.1. 「もの」の変化

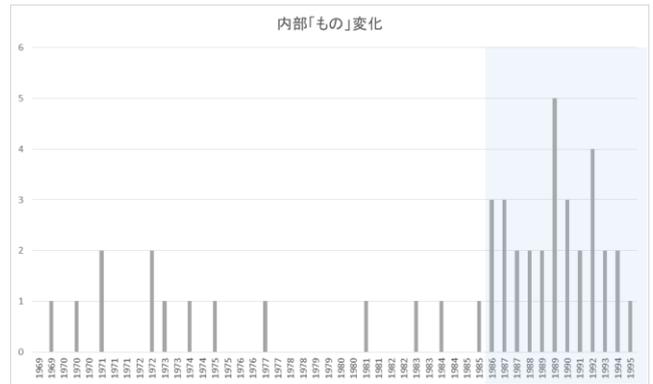


図2 内部「もの」の変化した数

内部の「もの」に関して作品ごとに変化があった数をグラフ化した。公開初期及び中期にかけての変化は数年おきであり、頻繁にはみられなかったが、1986年の37作品目以降は毎年変化がみられるようになっていることが分かる。

5.2.2. 変化の多かった「もの」とその「場所」

変化の多かった「もの」とその「場所」を平面上に表した。

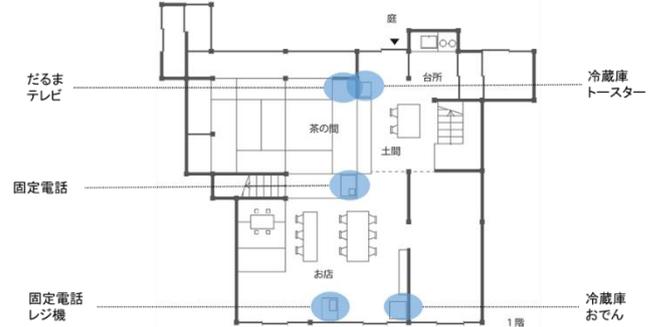


図3 内部の変化した「もの」とその「場所」

映画の内部空間における「もの」の中で特に変化が多くみられたものは、だるま、テレビ、固定電話×2、レジ機、冷蔵庫×2、おでん、電子レンジ、トースターだった。

5.3. 観光の変化

観光客として「とらや」を訪れる人の数を年ごとにグラフ化し、その変化をみた。1987年以降、増加していることが分かる。

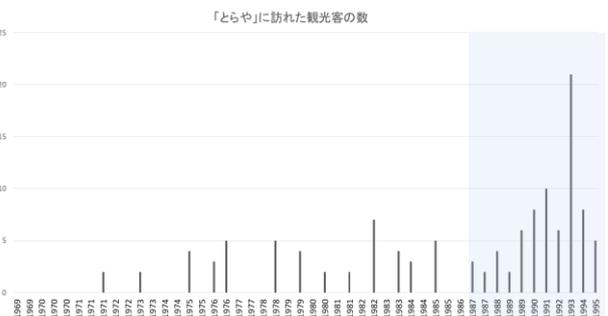


図4 「とらや」に訪れた観光客の数

5.4. 建物の変化

「とらや」における建物の変化をみたところ、第37作から第38作目にかけて、台所部分が広くなるように改修されていることが分かった。

5.5. 第50作目（2019年）の映画の変化

50作目においても、過去作と比較して変化がみられた。新たに設置された「もの」は、ソファ・金魚・手すり・冷蔵庫である。また、過去50作品においても分析の際に抽出した「もの」の中で、移動されたものと撤去されたものがあった。移動が確認できたのは、電子レンジとトースターである。電子レンジとトースターは台所の階段側に移動されていた。撤去が確認できたのは、テレビである。完全に撤去されていたのか放映されたシーンに映らなかつただけなのかは、判別がつかない。しかし、少なくとも48作目まで変わらず置かれていた場所にテレビの姿はなく、代わりにカラーボックスが置かれていた。

その他大きく変更されていた点は、空間の仕切りに関する部分である。過去48作品全てで、暖簾で空間を仕切っていた場所が、今作では引き戸に変更されていた。変更された場所は、土間とお店の境界。また、茶の間にも引き戸が設置されていた。過去48作品では、茶の間と土間の間には仕切りがなかったが、今作、引き戸が設けられたことで、人が通るたびに開け閉めする様子が目立っていた。

6. まとめと考察

これまでの分析より明らかになった、時系列的な変化における特徴をまとめる。内部の「もの」に関する変化は第37作（1986年）以降に集中している。映画内で観光客としてとらやを訪れる人数は、第38作（1987年）以降に集中している。建物の改修が唯一行われたのが第37作（1986年）である。また、先行研究によって明らかになっている、電柱及び電線の撤去は1987年から1988年にかけて行われている。これに加え、「もの」分析において、トースターの追加が第38作（1987年）、電子レンジの追加が第40作（1988年）で確認できている。この「ものの追加」に関しては、この2つの物以外確認できておらず、長期的なシリーズものの映画において、異例のことであるといえる。これらの変化が1986年から1988年の3年間にかけて、集中して発生していた。また、表1の分析からも、全ての変化が後半に集中していることが分かった。これらの要因は、ストーリーが変化したこと、現実においてバブル景気に突入したことで、経済状況が大きく変化したことなどが挙げられ、現実の変化が映画に大きく影響を与えていることがわかった。

また、第50作に関して、「もの」の変化は出演者が高齢になったことが要因として挙げられる。空間の仕切りについては、のれんだった場所や仕切りのなかつた場所を引き戸にすることで、空間を完全に断絶することができる。ゆえに、公的空間と私的空間を明確に分けることで、私的空間をもつ意識が強くなっている現代の思想を反映した結果であると考えられる。

7. おわりに

映画『男はつらいよ』は、一見すると変化がないシリーズもののように思える。しかし、その背景にあるものにまで注意を向けると、そこに隠された建築的デザインの意図がみえてくる。そして、その意図を含んだ変化は、現実の変化の影響を受けつつも、逆に現実にも変化を与えていることが明らかになった。また、映画内の「もの」や「観光」、「建物」から、生活や商売の変化を読み取ることができると証明することができた。

映画によって柴又は記録され、表象されてきた。そこには柴又の生活や商売の変遷がわかりやすく記されている。写真や文章などの書物による記録には、重要な価値がある。しかし、柴又のように観光地で生業を基礎として発展してきた町にとっては、多くの人々にこの町を知ってもらうことが重要である。映画であれば、娯楽として人々に楽しんでもらえ、町の魅力を伝えながら、歴史を記録していくことができる。そして、その映画が町の財産の1つとなり町の活性化につながる。少なくとも、柴又はそのようにして維持・発展してきた町だといえる。これらを考慮すると、映画という一種の娯楽が、街並みや文化、生活を表象することの意義についても有用性があるといえる。そして、映画『男はつらいよ』のみならず、その地域に根ざした映画がより多く撮られるようになり、研究媒体としてより多く活用されることを期待する。

参考文献

- 1) 荒井 美紀・鈴木 優太・中野 恒明：柴又帝釈天参道における現状と街並み形成の変遷に関する研究、日本都市計画学会、都市計画論文集、45-3、2010年
- 2) 曾根洋子・西山加寿子：映画における建築空間の変化に関する研究：その1・その2『男はつらいよ』を対象として、2001年
- 3) 飯島洋一：『映画のなかの現代建築』、彰国社、1996年。
- 4) 田口徹也・宇杉和夫：小津映画『お早よう』の住宅におけるコミュニケーション・シーンについて—建築計画のための空間シーンの構成及び分析に関する基礎的研究—、日本建築学会計画系論文集、23-28、2006年
- 5) 葛飾区史HP、www.city.katsushika.lg.jp/history
- 6) 五十嵐太郎：『映画の建築/建築的映画』、春秋社、2009年